

日本書紀傳 八卷下

和書  
一〇五二號

十五

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156 (24)		
函號	特	85	1

内閣文庫



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省  
圖書印

天照御魂神  
大和國城下  
坐天照御魂神社  
神  
新嘗  
天照御魂神  
皇太神  
春日  
真

建速須佐之男命  
神庫

建速須佐之男命ふと申す同意ありと云  
然る事あり又天照と冠るる世奉る皇太  
神庫第一坐せはあり然るを平田翁天津麻良命  
造ありぬ事天照御魂神天照高日女神天石室戸  
を聞き奉りて天手力男命榜幡千姫命あり此二神  
を神宮の古書に御戸開神と稱奉りて相殿に坐し  
其功用に依りたり三代實録貞觀元年五月十八  
日癸未投山城國正六位上天照  
御門神從五位下と有て式外あり和泉志に引る和泉  
國正應神名記に天光石止別神祠と有る同神あり又  
我孫天光電神祠有る電ハ伊那都賣と訓て稻之女  
意に上り又天照芽由氣大神と申す由云るを考  
合す可し又三代實録元慶七年十二月十八日庚申  
後伯耆國正六位上天高日女神從五位下と有る古事記

○日本書紀傳八

○五十四

内一二六八三號

小大國主神ノ女高比賣ト云々ガ有ル其ノ非ズ  
武藏風上ノ記ス多磨郡稻直郷多氣比咩神社所祭栲幡  
千々姫命也ト有ル其ノ多氣比咩神ノ  
天照ノ語ヲ冠ル云々ノ下ニ云フ也ト

次生月神一書云月弓尊月其  
夜見尊月讀尊

光彩亞日可以配日而治故亦

送之于天次生蛭兒雖已三歲

脚猶不立故載之于天磐櫟樟

船而順風放棄次生素戔鳴尊

一書云神素戔鳴此神有勇悍

尊速素戔鳴尊以安忍且常以哭泣爲行故令

國內人民多以矢折復使青山

變枯故其父母二神勅素戔鳴

尊汝甚也無道不可以君臨宇宙

固當遠適之於根國矣遂逐之

生月神ハ上ニ生日神ト有テ對ハル者ナリ共ニ神

名ニハ非テ細書ニ月夜見尊ト申テ受張タル神名

ニ事ト有テ大日靈貴ノ例ト如ク凡テ神名人名共

ニ居地ト行事ト因テ異有リ其心ト同テ不可テ者

アリ今例を示シテ續紀四十卷ニ延曆九年十一

月壬申外從五位下韓國連源等言己等是物部大

連等之苗裔也夫物部連(未)等各國居地行事別為百八

十氏是以源等先祖塩見以父祖奉使國名故改物部連

為韓國連然則大連苗裔日本舊民今号韓國還似三韓  
之新來至於唱導每驚人聽因地賜姓古今通典伏望改  
韓國二字蒙賜高厚依請許之有以見心一物部連  
ハ物部部を主山ニ有テ行事ハ少韓國連ハ彼國ニ神  
使を奉り到ルニ因テ此ト行事ハ非テ傳三卷八十  
ニ依テ氏ニ稱ルニ有テ行事ハ非テ傳三卷八十  
下四卷十八下五十六下記傳六十七下二日神ニ神名有  
テ月神ニ神名無ク如何ト云ルニ信ニ然ク言ハレ  
ル也舊事紀ハ此神紀を取ル者多ク先生生日神号  
大日靈貴 次生月神ト有ルハ古クハ日神ト方ホシ神  
名を被舉ぶル本ト有ル可ク古語拾遺ニ生日  
神月神ト見テ顯宗天皇御紀ハ神託言ハ我月神若  
依請獻我富福慶ト所見タルハ月神ト耳ト申セリ

事決一神名式又山城國綴喜郡榊井月神社大月次新嘗丹  
 波國東田郡小川月神社名神多と有り此等ハ月讀神社  
何れハ  
 有て所あり水なり若し此申來り古傳  
 を予り忽し高く水なり神所爲る然るを天神本  
 紀あり供奉神あり中ハ天月神命壹岐縣主等祖と有ハ  
 疑ハ一ハ若し月讀尊あり外ハ天月神命あり申べ  
 神ハ有べ思えを若く顯宗天皇御紀あり  
 右ハ神記あり下ハ壹伎縣主先祖押見宿祢侍祠と有ハ  
 依て鶴山者者あり思へ然し見え故思  
ふ出雲風土記ハ意宇郡屋代郷云伊支等之遠祖  
 天津日子命詔云有ハ此天津日子命、瑞珠盟約

章ハ天津彦根命と可ハ姓氏錄和泉國未  
定雜姫小茨木  
 造天津彦命之後者と有ハ以知て予り備月神ハ素戔  
 鳴尊同神あり坐セ月神ハ神ハ御裔ハ壹伎縣主と云  
 事無ハ難ハ且彼五男神等ハ日神ハ屬て日神  
 の御子ハ坐セ宝劍出現章第五一書素戔鳴  
 尊曰云吾見所御之國と宣へ思ふ可ハ然ル  
 ハ天月神命と申す此ハ月神あり渡る給ふけり  
 又風土記を稽ふ意字郡由貴社有ハ和名枚ハ壹  
 岐ハ由岐と有ハ思合又其社今山代御向馬村  
と云ハ在リ姓氏錄ハ山背忌寸天都比古祢命子天  
 庭比止都祢命之後也と有ハ合ハ思ふ可ハ又神名  
 式ハ壹岐國石田郡見上神社見由此ハ近江國野洲郡  
 御上神社名神大月次新嘗と有ハ其祭神ハ古事記伊

公若然者、公若然者、  
下移之者、  
下移之者、  
下移之者、第ニ書  
事あり

邪河宮段ニ天之御影神と有テ天津彦根命の子あり  
 近江守り壹岐守り移せるあり可一但此ハ事ハ因  
 其証を示ハス  
 ○一書云月弓尊此神名ハ例見當  
 古事記ニ豊宇気毘賣命を又登由宇気神と作此豊  
 受宮を續紀第四十二詔ニ等由氣乃宮と書サレタル  
 其例あり月讀を月弓と申セリより更ニ別あり意  
 有ハハ非あり万葉三十二初月歌ニ天原振離見者  
 白真弓張而懸有夜路者持吉ふとい有テ弦月ハ状を  
 弓と見成る常ふハ其心有テ月弓とも書ク一書ハ  
 弓ハ有を取レハレテ者あり可一然レを神代紀口訣  
 弦之者ふと云ハ釋名ハ弦月之半、名也其形一旁  
 曲一旁直若張弓弦也と云レハ依テ儲たる安説あり

○月夜見尊月讀尊ハ字ハ異ふる耳よ其語同トハ  
 此ハ此ハ神紀を撰成サレテ時ニ其字ハ様々あるを  
 擬出サレタルあり月夜見尊第十一、一書ハ見之月  
 讀尊第六一書ニ出たり  
古事記ハ月讀命と有テ他  
 古書何れハ然レ但弓と讀  
 借字ありハ抱  
 師名義記傳六  
 七十一師説ニ綿津見  
 ハ可レハズ  
 山津見ふとハ如ク美ハ持マテ月夜持ハ意ありと有  
 少夜之食國を所知者大御神日坐セハ然レ有ぬ可  
 一故都久用美ト訓ベク古言ハ例あり月夜をハ都久  
 用テ耳万葉ふと小多ク訓ハあり都使用ト有ハハ  
 古書ニ見當ルト見由思ふ日神を大日靈尊ト申

奉るハ大晝を所知者ヲ義多ク對して月夜を所知  
 者ヲ義多ク咩と見と共ニ所知者ノ意多ク事ト大日  
 倭ニ註せらるカ如ク然ルハ日神ハ晝を持テ月神ハ  
 夜を有テ一々大地ヲ晝夜を所知者ヲ義多ク事明ク  
 け一又黄泉ト云名ト相通テ南也ト云レタル事ナリ  
 月トを一ニ爲スナリ平田翁ニ至リテ愈々一ク成ル  
 ことト僻事多ク其ハ此ナリ次ニ辨ルヲ以テ其非  
 ぬ申を曉 脩月トハ大地ヲ附屬テ真空を徃巡ル由  
 多ク此出來始ル事ハ一ト其傳無レハ今知ル可  
 ろゾト雖モ事ヲ状を以此を攷ルニ國常立尊ヲ先  
 成出坐テ大地ヲ公運一ト出來ル事其ニ因循テ又私

運テ云事又神隨ふ一々成ル即豊國立尊ヲ成出テ  
 所知者ヲ所以是多ク此ニ因テ一歳を成一其を細分  
 テ一日ト成テ脩神世七代章第六一書ニ有物若浮膏  
 云々因此化神號國常立尊ト有テ八洲起元章第四一  
 書ニ二神相謂曰有物若浮膏其中蓋有國字乃以天瓊  
 矛探成一嶋名曰磯馭廬嶋ト有テ已ニ此時大地ヲ凝  
 結ハル運ト成ルナリ一々此ナリ以前ニ已ニ判ル  
 可キ物ハ悉ク分ル留マシテ可キ物ハ悉ク止メテ混成  
 事有テ一々ぬカ月ハ其ナリ先ニ大虚ニ懸ル事  
 著明ト若テ月ハ大地ニ屬タル物故ニ大地ヲ自轉ト

因循ひて巡てり有りしうども未其主宰と坐神ハ神在  
せざりしより高天原ハ已に在しうども其主宰と坐  
す日神の後ハ生坐あはれ其神と成坐る如く月神  
も復は後ハ成坐て其を所知看す事と成坐る  
あり備下ハ述る如く月讀尊ハ素戔鳴神と同神と坐  
せハ其尊ハ天下を所知と事依り給へる中ハ此ハ属  
る夜之食國ハ其ハ相副れり物ありし事ハ明るる不  
らざりしハ別神ハ如く傳ハありし者あり月ハ判  
し始ハ事己ハ傳五卷二十八丁七卷八十丁ハ云るを  
見合せて曉る可し但此ハ少縁ハ説るるぬハ此ハ一章  
ハ云盡す可し非ハ此ハ以下素戔鳴尊ハ受る是  
の正書一書ハ傳を悉く讀通して思ひ明るむ可し者

夜ハ鎮火祭詞ハ夜七夜晝七日と有り古事記ハ此ハ  
事を次詔月讀命汝命者所知夜之食國其事依而賜也  
と有ハ日神の晝を所知看す對して夜ハ國を所  
知せとあり備字ハ世ハ夜と分て書れり言義ハ  
同ト在る可し惣て世ハ此世ハ限ハを云稱する大  
地ハ日ハ背されり間を夜と云るハ大元此世ハ  
限りハ皆闇くし何處迄ハ皆夜ハ如き者ありハ天  
中ハ天日在り天極ハ至る是ハ星辰有りて處ハ光  
を放つと雖も光ハ限り有る常闇ありて處ハ限り  
非ハ其を世と云るハ古事記沼河北賣歌ハ阿遠夜



麻迹比賀迎久良婆奴婆多麻能用彼伊傳即年有外  
 如入日公隱之此ハ素の白地の世ハ出有むと云ふ  
 て世ハ夜ハ同ト事ハ在れども全體の世ト晝夜の  
 夜トを別たむ爲ハ聲ハ上下を以て世ト夜トを分る  
 世字ト夜字を以て混れど令た者多ク又古事記  
 御神向天石屋戸而刺許母理坐也尔高天原皆暗葦原  
 中国悉闇因此而常夜往と見えたる常世往ハ世中を  
 御照ハ坐ト事ハ天日ハ大神光ハ隠ハ依ト常夜  
 の来ト云事ハ多ク思合マ可ク又少名毘古那神  
 者度于常世同也有ハ外國を以て云祢多クハ外國  
 ハ熱地ハ素ナリ多在ハ夜國ハ云ハ有  
 常夜ハ富多ク地ハ多ク以て常世トハ云ハ有  
 都ハ對て邊僻多ク地ハ鄙ト云ハ日光ハ疎ハ由  
 云ハ有テ常夜ト云ハ似ハ此等ハ以て世ト夜ト  
 常世ト常夜ト其差別ハ有ハ本一ハ有テ知ハ

又記傳ハ此大神神ト即今天ハ坐ト月神ト坐ト月  
 の光を即月讀之光トハ万葉ハ詠ハ借男神ト坐事ハ  
 疑無ハ猶云ハハ万葉六トハ天尔坐月讀杜子十  
 十ハト十九ト月人杜子十五トハ月人字登祐六トハ  
 十四ト十八トト山景左佐良棧杜子ト詠ハ其左ハ或云月別名曰佐  
 敢良衣杜士也ハ詠ハ知ハ一傳姬命世記ハ  
 月夜見命二座形馬乘男形也一書曰馬上男  
 見此文例ハ補ハ引ハ皇太神宮儀式帳月讀  
宮條ト正殿四區之中云ハ次稱月讀命神形  
乘馬男形着紫御衣金作帶大刀佩之次稱荒魂ト有  
世記ト一書曰ト云ハ是ト因云荒魂命ト小泉康敬  
託ト最世社記ト云物ト月夜見命荒魂命奉ト送ト魚見  
社ト云ト神名式ト伊勢國多氣郡魚海神社二座ト有

を機殿儀式帳に魚見社三前是月讀命豊玉彦命豊玉  
姬命合三柱神靈也と有り然れハ荒魂命ハ豊玉彦命  
坐事著シ故豊玉姬命之後合世祭ル者多ク  
有ハ謂ルハ言多ク又上日神條引リ尾崎社記  
洗鼻因以生神號速佐須良比賣神云ハ是即素戔鳴尊  
和魂而分身神子也と有ハ月神和魂坐右引  
引ル万葉歌月別名曰左散良衣社也と有ハ思  
合ナ可シ此ハ月讀尊素戔鳴尊同神多ク事知  
ル侍此大神月国ニ往坐テ夜之食國ニ所知者事  
ハハ皇太神ノ天上を所知者ハ是レ後ト見  
由其ハ第十一書ニ天照太神在於天上曰南葦原中  
国有保食神宜尔月夜見尊就候之云々事古事記  
ハハ速須佐之男命と有り然レハ御紀ハ月夜見尊と  
傳ルハ右ノ結び又天照太神怒甚之曰汝是惡神不

須相見乃與月夜見尊一日一夜隔離而住と有レ一日  
一夜隔離而住ハ神逐ハ此ノ後又月国を所知者大  
地ノ晝夜を日神ト共ニ持分給ハ傳ル月夜見尊ト御  
名ハ混ルハ此ハ入ル事著ク者多ク其ハ宝劔出現  
章ニ云々を合世讀テ曉ク可シ但御父大神ノ夜之  
事ハ因テ此序ニ初レ往見給ル侍出雲風土記ハ  
嶋根郡千酌驛伊佐奈根命御子都久豆美命此處坐然  
則可謂都久豆美而今人猶千酌號耳と有レ決ク此月  
讀尊坐少其都久ハ月少豆美綿津見山津見ハ例  
有レ事上ハ記傳を引ルカ如ク考信密藏一本神系圖

傳二百七十一

小月弓尊子嶋根見命と有る嶋根見命、其郡名小因  
以る名と聞え又異本神系圖小月讀尊其子手力雄命  
嶋根見命と並たる手力雄命、<sup>天雷</sup>思兼神子多水ハ誤ふ  
以る嶋根見命子生馬武見命と有る風土記ハ嶋根  
郡生馬郷有る其地名ハ因水ハ神名多事著けりハ  
都久豆美命月讀尊同神ハ事云々更ふり又同記意  
宇郡條ハ熊野大社ハ並びテ賣豆貴社見由神名式ハ  
賣豆紀神社と有る是より然るを三代實録ハ貞觀七  
年冬十月九日丁巳<sup>後</sup>出雲國後六位上女月神從五位下  
又同十三年十一月十日壬午授出雲國後五位上女月

文神代系圖傳等

神正五位下と有る正一ノ月神ハ女神と聞えり熊  
野大社ハ素戔嗚尊坐此彼思合せと曉る可き者  
ありりハ然るを風土記抄ハ所祭下照媛命也と云々  
照媛命ハ云習ハせたるよしハ右ハ引く考信  
爾本ハ招平讀岐守頼 朝臣ハ建ハれハ學館ハあり  
を吾友小泉康敬ハ抄書セテ再引出ハるより尊卑  
分脈ハ收水ハる招運録ハ生馬武見命を手力雄命  
子と爲るハ誤あり信守ハ右ハ如く考合すハ甚  
ハ分明ハるを風土記ハ頃己ハ別神ハ如傳ハり  
ハ故ハ都久豆美命を別神ハ如心得ハりハ故ハ  
伊佐奈積命御子トハ更ハ書ハりハ者ハ有ハるハ又水  
戸家本舊事紀ハ亦名を月讀御食尊考信爾本舊事  
紀異本ハ豊月誦命トハ豊月誦大神トハ有ハるハ  
其御食尊ハ美祁ハ美表志ハ其訓詳ハるハ雖ハ彼夜

今聖異記の磯城  
 島金刺宮食國天  
 皇天國押開廣庭  
 命也と有て下食國  
 久亦半師須と注し  
 又磐余譯語田宮  
 食國海名倉太玉  
 敷命也と有て食  
 國の字を常小御  
 宇と用ふる所小  
 置り又諾樂宮  
 食國常姬阿倍史  
 皇代と有て下食  
 國の上字半師志  
 と云注有るなり

之食國小依ノ後ノ方ニ有ル可シ然レハ月讀ト申テ御  
 名ノ下ニ其國を食給ル不レ意ニ言を副テ申セるナリ又  
 豊月誦命ノ豊ハ月ノ動ニ巡ル不レ由シ依ル尊ノ例  
 此小同ト記傳ニ夜之食國ハ万葉五ノ企許斯遠用久  
 尔能ニ十八ノ須賣呂伎能ニ未能美許等能伎已之  
 字須久尔能保良尔云ニ二十ノ伎已之未須四方乃  
 久尔云ニ此ノ伎已之字須ニ伎已之未須ニ即知看ト  
 云ト全ク同意ニ有ルを以テ國を治メ有リ給ル事ニ云  
 之を曉ス可シ借食國ト云例ハ輕嶋宮殿ニ大者命  
 執食國之政ト見エ續紀宣命ノ食國天下トも四方食  
 國トもノ向看食國トも教多有リ万葉ニも多在ル中ニ  
 十七ノ須賣呂伎能字須久  
 其光彩亞日ハ光彩ハ上  
 之光華明彩ト同ト亞日ハ日神ニ亞テ御身ナリ放給  
 不レ御光ノ彩ト坐ル所ニ有リ寔ニ月ノ夜之食

國トも云テ素ナリ暗體ニ域ニ有リけレ其出來  
 始ニ往ル古ノ天日ノ光を受返シ大地を照シけ  
 むレ然ル物々月神ノ所知看テ時ナリ其大神ノ光  
 彩ト照足ハ今瞻奉ル成ル事ニ已ニ  
 上ニ註ス加シ天地ト初判ル天日ノも素ナリ  
 光體ニ御國ニ四方八面を照シけレ後ニ  
 日神ノ其を所知看テ其光ニ坐ル大神身ノ  
 大神光を得テ天地ノ底方ノ内ニ照滿ル事ト成  
 小ト同ト事ナリ第一書ニ大日靈尊及月弓尊是  
 質性明麗故使照臨天地ト有ル思合テ可シ然レハ  
 亞日ノ

第一書日月夜  
見尊者可以配日  
天事也

日ハ日神と訓ハ一坎多配日也此ハ同ト第二一書  
ハ日月既生ト有リ日月を生ラ多ラテ日神月神を生  
出ラ事多ラテ  
以テ覽ラ可シ○可以配日而治ハ三大考ハ此ハ月日  
の旋轉ラ世ニ成テ其見ラ所ニ依テ云ラ傳多ラ可シ  
ト云ラ信ニ然ラ抑月讀尊ト申ラ素戔嗚尊ト御事  
ハ渡ラセ給ヘラ其月讀尊ト申ラ御名ハ後ハ其國  
を所知看シ初テ後ト事多ラハ配日而治ラ高時ト  
宣給ラ可シ非ラを思ハ可シ然ルハ古傳ハ素戔嗚  
尊ト天下を治ラ係ト夜ト食國を治セト宣ヘラ不  
ラむを其事ハ二ニ分ラテ別神ト如ク又別事ト如ク  
古クナリ誤傳ヘラ多ラメド又強難ト事有ラ其

ハ上ニ引ラ顯宗天皇御紀ハ阿南臣事代御命出使ト  
任那於是月神着人<sup>謂ク</sup>曰我祖高皇產靈尊有預鑄造天地  
之功宜<sup>下</sup>以民地奉我月神若依請献我高福慶事代由是  
還京具奏奉以歌荒櫟田<sup>歌荒櫟田在山</sup>有を思ハ可  
シ此ハ任那國ニ大神使を下給ハラ時ニ當ラテ我祖  
ハ御功を舉給ヒテ天地を預鑄造<sup>ソ</sup>ト事を宣ヘラハ  
此神ヲ國土を造給ヘラ高皇產靈尊ハ預<sup>ソ</sup>テ相造給  
ヘラ故多ラメド此傳ハ可以配日而治故亦送テ天  
ニ有ラ如ク多ラむハ國土ニ於テ事迹ハ無ラ可ラ  
筈多ラ然ラ不斯宣ヘラ欽明天皇御紀ハ百濟國王

小仰下さるる語、夫建邦神者天地割判之代草木言  
語之時自天降來造此國家之神也。と有る其建邦神、  
鈴屋大人説玉勝素戔嗚尊由云水穴子、實小  
見徹したる説ふる、此を以思ふ、任那其地方、  
以ハ其國家を造立給ひ、由、因て月神の御託、有  
けり、より宝劍出現章第四、一書、素戔嗚尊帥其子五  
其第五、一書、素戔嗚尊曰、韓師之鳴、是有金銀云々、  
と見え、神名式、小出雲國、小韓國、伊太、社、申、  
意、宇都、三社、出雲郡、二社、有る、共、五、十、猛、命、  
を、思、ふ、可、し、借、右、御、託、其、大、神、の、知、を、建、給、ひ、  
時、又、高、皇、產、靈、尊、の、預、鑄、造、り、此、ハ、先、其、大、神、を、祈、奉、  
ら、ず、ハ、有、べ、く、故、民、地、を、以、奉、る、ハ、我、共、く、小、福、慶、  
を、む、と、さ、り、次、日、神、の、御、託、の、有、り、小、有、預、鑄、  
天地之功、の大御言、無、此、大御神、ハ、小、國、家、を、造、立、

給ハ、さ、り、ハ、其、事、を、漏、し、給、さ、り、又、古、語、拾、遺、小、仍、就、於、傳、笠、鏡、色、殊、  
立、磯、城、籬、奉、遷、天、照、太、神、及、草、薙、劍、と、有、る、天、照、太、神、と、  
申、す、ハ、八、咫、鏡、の、御、事、さ、り、草、薙、劍、ハ、素、戔、嗚、尊、の、御、靈、  
さ、り、然、る、皇、太、神、宮、儀、式、帳、ハ、此、掛、畏、天、照、坐、太、神、月、  
讀、之、神、二、柱、所、稱、伊、弉、諾、尊、伊、弉、册、尊、共、為、夫、婦、合、所、生、  
神、御、形、鏡、坐、と、有、り、此、ハ、月、讀、之、神、一、本、ハ、月、讀、大、  
神、と、有、り、素、戔、嗚、尊、の、御、名、ハ、無、を、以、て、也、又、考、合、す、可、  
き、者、さ、り、其、御、形、を、此、ハ、舉、げ、る、ハ、古、事、記、日代、小傳、建、  
宮、殿命、受、命、罷、行、之、時、參、入、伊、勢、太、神、宮、拜、神、朝、廷、云、々、時、  
傳、比、賣、命、賜、草、那、藝、劍、亦、賜、御、囊、と、有、り、熱、田、ハ、齋、奉、此、

故云神代より御形ノ事を云ふ者あり其月讀  
 御形素馬男形と有ハ奈良朝廷御世定祝と有ハ其  
 頃造奉り奉形あり可ハ舊事紀より天照太神神月  
 讀命ノ御生坐ル所ハ茲坐五十鈴川上謂伊勢齋大神  
 有ハ草薙劔の共ハ皇太神宮ハ茲坐ハ傳ハ何れハ  
 有ハ者あり○亦送于天ハ日神ハ以天柱舉於天上也  
 云ハ依テ亦ハ云ハ右ハ辨ル如ク此ハ後ハ  
 月日ハ旋轉セ世ハ成テ其見ル所ハ依テ云ハ傳ハ  
 ハ其起リ瑞珠盟約章ハ於是素戔嗚尊請曰吾今奉  
 教將就根國故欲暫向高天原與所相見而後永退其勅  
 許之乃昇詣之於天也と有ハ月神ハハハ別神ト傳ハ  
 云ハ送于天トハ傳ハハハハ者あり然レヲ  
釋述義

小引ハ私記又向次生月神其光彩亞日可以配日而  
 治故亦送之於天云ハ已無登橋歟日神以橋得登天者  
 月神何無此儀云ハ答先文以天柱爲登橋送日神於天  
 之由明矣送月神之時定用同橋歟製文之法具前略後  
 常事也云ハ其ハ此時ノ事を深クハ取ルハ  
 説より出雲風土記ハ神須佐乃乎命天壁立廻坐也ト  
 有ハ者ハ何レハ天柱ハ 借月ハ大地ハ屬ル物ハ  
 用ル耳ハ何レハ天柱ハ 借月ハ大地ハ屬ル物ハ  
 其旋轉ノ事ハ大地ハ自轉ハ從ヒテ西ナリ東ハ巡  
 行ルハ万葉七ト久方乃天照月者云ハ十三ハ天有  
十一ハ久方天照月  
 哉月日如四十四ト三空去月之光ニ多ト詠テ即天  
 中ハ象物ナリ三十三ト久堅乃天歸月乎網爾刺我大  
 王者蓋尔爲有ト詠ルハ蓋ハ見象ナリト耳誰ハ  
 思ふハ然レハ網ト云物ハハハ天中ハ網羅ル

気脈の稱ふて十九四十十天尔波母五百都網波布萬  
 代尔国所知年等五百都奈波布と有る是より月の  
 大地に屬て巡るハ云も更なる此国土の天日に屬て  
 巡れるも素より此網の気勢を牽る事已の傳三世  
下七十傳四下百註せるを思合せて曉る可くある又  
二下葉ハ久方乃月夜宇清美七久堅之夜度月乃不  
 有る天の物より續けたるあり此の故亦送于天  
 中有る混水なる事ある月も亦  
 天中の一象物なるを忘てく○次生蛭児第二一  
 書亦然し神皇系圖と云ふ生一日神三男月神蛭子  
素契鳴尊云  
 と有て此章の蛭児を計て四神出生章と云事  
 此ハ有るはと訣めて傳傳ふて八洲起元章第一一書

第十一書等淡洲と共く生坐して有る是不正傳ふ  
 る可き由傳七五十季一註せるが如く但其の  
 二ハ蛭児を神の如く彷彿し記さるたる誤なり  
 又此の一々三男と列ねる原しけれども中ハ  
 取べき事少くはハ○雖已三歳脚猶不立第二  
 杖此見合せて考ふ可し  
 一書ハ有て甚愛たり但脚ハ葦の誤傳あり已ハ  
 云るが如く蛭児ハ最初生坐る国より有るは陰  
 神の神言先立しく却過に依て成れる故に土毛の  
 不生立る瘠地あり故に三歳の向を試給ひしは  
 也葦まゝ生立ざりしが第二一書ハ順流放棄と  
 有るが如くして見教より充給はざりける者あり然る



合明石巻の大海の基  
うらふれ蛭の足の  
立さう一年の経  
ふけと有し例の  
蛭子を人体と心得  
たる所為なり

を言傳より文字に譯すと一々、國と心得て、草と  
書す可き事あるも神と思へしむ、脚と心得て  
然し記さる可き事あり然れども然すか草あり  
此子者入草船而流去傳七卷五十四丁故に古事記  
流して有る草船、此の天磐椽樟船と共、非事なり  
と、草と云事、遺れり、物を生じ、事を立て云例ハ  
ハ天神の神恩頼ふらむ、  
万葉一丁、真木立荒山道守二丁、小磐代乃野中  
尔立有結柘又丁ハ、又超出之堤尔立有柘木之三丁  
又真木之立荒山中尔ふと猶多在る、常々木立ふと  
云とハ、少異ふして生る事を立有とハ云るなり、但木  
あぶふこころ似著し、るめ草ハ草あり、立と云ハ

如何と云人ハ有るなり、草亦共、其種子より芽む  
を芽立と云ハ、又和名抄ハ、蔓久多知蔓青之苗也と  
有る名義抄ハ、蔓立と有るハ、草ふも立とハ、何と云  
ざむ此を以て脚を姑く草と改め、其生出さむ  
事を猶不立と云義ハ心得可し傳七卷五十四丁  
凡肥美之地、草多生と有るハ、如く肥美なり、地  
は、其物ハ生立ざる者なり、此を以て此ハ不毛の地  
と謂ふ、又蛭見と云る、  
一書ハ、日月既生、次生蛭見云、次生素交鳴尊云、  
次生鳥磐椽樟船、以此船載蛭見と有る古事記ハ、  
此の事ハ、無くて既生國竟更生神云々の中、次生

神名鳥之石楠船神亦名謂天鳥船と有り古史徵第十一段  
此傳を舉ぐ云く此も混マヤシ乱たる傳あり其の蛭児を  
載て放たる船の葦船あるを天艦楸樟船とも鳥艦楸樟  
船とも云るハ楸樟以て船を造る事始りて後又言出た  
る誤の傳あり然るハ楸樟ハ素交鳴尊の木種を殖生  
し給へる時ハ吾見所却之固不有浮室者未是佳也と  
詔ひて御眉毛を抜敬し給へるより始て生れり木ふ  
るを楸樟ハ可以爲浮室と宣定給へる木ふれハ其神  
より以前ハ無り木あり故艦楸樟船と云ハ楸樟  
以て船を造る事始りて後又云出たる傳あり然れば

古事記の右の傳ハ神代紀ハ生鳥艦楸樟船と云る傳  
の再び誤れり傳ありと云れば此説の如但葦船の事  
猶正しと見ゆれば此大人ハ蛭児を神ハ如心得  
ハるハ此ハ説ハ委しうござるあり此蛭児法洲  
の説ハ神我心を南ミナミに然るを神名式ハ和泉國大鳥郡  
て令得給へる者あり  
石津太神社を俗ハ石津ハイヒス蛭子と云る其社傳ハ蛭児  
神天艦楸樟船ハ乘て順風ハ放たれ此船艘とてして  
石津浦ハ著く尊五色の神石を携來て此所ハ置給ふ  
今社前ハ在り所以ハ石津と云ふ其船ハ著く處ハ石  
津岩山と云ふと云り此類説和泉志ハ載たれば  
此ハ何れの神ハ艦船と云著給ひ一事ハ有る附會

下蛭見神と云ふは今論ふ不足若くは事代  
 有る所ある可し世は此神と大國主神とを合せて蛭  
 子大黒と祀ふ事常ふれはあり已に棋津國菟原郡大  
 國主西神社を今西宮と云ふ其地主ハ事代主命ハ生  
 故又西宮夷と申はるを思ふ可し予嘉永六年二月  
 小詣りて其五色ハ神石と云物ある尋しり人々  
 知中と云い然れハ其社傳を作れる人ハ安説と云  
 を和泉志ハ作者也 ○順風放棄ハ第二一書ハ順流放  
 棄と有るむ且し可平田翁説古史ハ此時未風  
 ハ無き時なりと云はれは菟子説の如くありと  
 風神ハ未成坐りし間ハ事なりハ然と有るむを予ハ  
 葦船を取らばハ愈以て順風と云ハ取口訣ハ順風  
 謂て有る落着ぬ説なり然れ 放ハ傳七五十流ハ之ハ  
 ハ此ハハ深く心を留めけり放ハ傳七七十流ハ之ハ

下ハ云り棄ハ宇氏多麻布と訓ハ瑞珠盟約章ハ吹  
 棄氣噴之此云浮根干都集伊浮岐能佐擬理と見え古  
 事記ハ千矛神禱歌ハ曾述奴岐宇氏と何ハ棄を  
 宇都流と云ふ古言なり 棄を須都流と云ハ其ハ意  
 方を空虛と云ハ彼方ハ移ハ急なるなり宇都流とハ此  
 遣ハ子ハ其意緩ハなり ○次生素矣鳴尊ハ進雄  
 尊ハ意ハ素矣ハ進むなり天孫降臨章第二一書ハ  
 焔初起時共生兒號火酸芥命と有ハ焔ハ初て起進む  
 時ハ生坐るハ依て火酸芥命と申せらるなり其第三一  
 書ハ火炎盛時生兒火進命又曰火酸芥命と有る此ハ  
 酸芥ハ進む事ハ曉る可し又出雲風土記ハ美保

公事記ハ須佐之男  
 大神之所也須理昆  
 高命坐り神其大  
 神ハ替奉給り大印  
 功を金三給りハ神  
 の進りハ坐りハ  
 又

御所造天下大神命要高志國云子奴奈直波比賣命  
而令是神御穂須美命是神坐矣故云美保有御  
心進命ホスミノミコト意ふり此建御名方命亦名ふを此神  
の心進ウラサヒシ爲給ひ一事思合可又万葉九三十一智奴  
壯士宇奈比壯士乃廬屋燎須酒師競而相結増爲家類  
時者燒太刀乃手預押利入水火尔毛將入跡立向競  
時尔云々有須酒師競進爲競ふ此續を以  
其状を曉可又十八卷敬和立山賦歌小之良久  
多可吉多知夜麻と有白雲母能知邊宇於之和氣安麻曾天進  
高立山と云々始終進義を貫たるあり  
又勝佐備神佐備浦佐備神進浦佐備情進ふ事云々更  
備勝進神佐備

不斯北素戔鳴尊と申奉る御心行ひ共進内  
御在坐り故御父大神の勅任し不從給ひ  
御母國に往坐むと宣ひ又高天原不參昇る  
時御誓ひ時勝佐備の御所爲有り又天上より  
逐ハ水て國土に降坐て其天罪を贖ひて國土人類  
御恩頼を幸給ふ事耳進給ひ其御子大己貴命  
國土經營の事を授け寄て終に御母神の根國に  
到坐る始より思ふ進御心を竟給ふる  
又夜之食國に御靈を分て入給ひて月讀大神と坐  
て天進り又進り照し給ふると自餘の諸神より異

小御稜威の雄偉しく健く進めり小御在るか故より  
記傳を始め諸書に此大神をいふ思ふ神に如く  
説成せる事ふら有りども瑞珠盟約章に神性雄健使  
之然也と有か如く其神性の雄健をか故に思行の如  
く見ゆれども其事の運びより無上く尊く妙く奇  
しく善事の出来たる此大神の又殊に勝れたる所  
第六一書に復洗鼻因以生神號曰素戔嗚尊と有り  
古事記と同傳あり有りども此の二神の相共  
生坐る御子ある事上なる生曰神の下に委しく  
そ見合して曉る可く記傳六に目に見たる穢に淺く  
て名残無き故に其より成坐る月日の大神の善神  
坐を鼻に嗅ぐ思臭氣に淫くて其名殘亡難き故に須  
佐之男命の思神に坐りしと云れ然るに素戔入進の義  
に思ひ漏れたるあり

あり然る物より思ふ謂ふに非ず第六一書に素  
戔嗚尊者可以治天下也と有か如く信ふ天下の君王  
小勅任され奉給ひて宇宙を所知看す大神に坐せし  
日神に亞て尊く坐事申すも更なるか御父母二神の  
御名の率ふふの義なるも其御子と坐て天下を治給  
ふ此大神に進む由り御名坐るを合すれは率ひ進む  
義あり然れに二神の国土を生成し坐るより以後の  
事業ハハ此大神の受託しし全く成就せる事灼然  
し此に因り素戔嗚尊と稱奉りて定ぬる位名と成  
ぬる者より出雲風土記飯石 郡條須佐御神須佐能袁命

詔此國者雖小國々處在故我御名者非着木石詔而已  
命之御魂鎮置給之處然即大須佐田小須佐田定給故  
云須佐と有る素戔鳴尊と申すは佳名なる故に御田  
を定て其よも御名を著給へり者あり若思しと神  
の意あり  
み々侘り云むこり有め己命の御所爲として自  
號けさせ給ふ可よ非ざるを曉る可し此神を思しと神  
の如く説成し奉らふと借此は伊弉諾尊伊弉冉尊共  
い甚く可畏き事ふこり議曰云々何不生天下之主者歟と有る御子生坐る中  
小日神ハハ高天原を所知有る皇太神ハ生くせば  
別り事ありて次は月神ハ此亦名あり其を此ハ  
合す此ハ天下之主と坐て月國を第て所知有る神

ハ此大神を陰々有る事無し下は故其父母二神勅素  
戔鳴尊云々不可以君臨宇宙と宣へるを以て天下  
之主は渡りせ給ふ事知心し然此ハ二神の天下之主  
者を生坐むと詔給へる御心を得て成坐るハ此大神  
ハ坐事申すも更なり此亦皇祖天神の相預て如此く  
成し行給へる由事ハ依れり此ハ奇しき事ふむ有る  
其ハ二神ハ何を生天下之  
主者歟と御心を疑して生奉給へる故ハ日神ハ天上  
を所知有る皇太神ハ渡りせ給へり古事記御天降  
段ハ天照太御神之命ハ豊葦原之千秋長五百秋之水  
穗國者我御子正勝吾勝る速日天思穗耳命之所知國  
言因賜而天降也と有る皇太神ハ所知有る大御國ハ  
如くふるハ二神ハ生奉給へる時ハ所謂ハ依る事ハ  
少若て其天思穗耳尊ハ素戔鳴尊ハ御子ハ坐故ハ  
宝鏡出現章第五一書ハ素戔鳴尊曰韓御之嶋是有全

○日本書紀傳八

○七十四



ひて潮汐シホする者なる故に此尊ミコの事コトは似着ニツキは  
るすと思ひて月讀尊ツキヨミノミコと申す御名ミナの下は牧ウシて傳ツタは  
るか故に終ハシり別神ワケガミの如く傳ツタはりたる者ふれども滄  
海ソウカイ之原ノハラと云ひ滄海原潮之八百重ヤチハチノカサと云ひ国土クニの惣號ソウガウ  
ふ事右ミダリに註ツケる如くふれ此コノ可以治天下也コトヲシラセと有アり同  
意イなり  
服部中庸フセベノナカノリ説ツケふ右ミダリの傳ツタはるを合アせて是須佐之男  
命ミコトノミコと申す月讀命ツキヨミノミコの亦御名ミナと信シふ一神イツカミふ  
る可カし又御紀ミコトノキの傳ツタはるを考見カウケンする何れナニの傳ツタはり須佐  
之男命ミコトノミコの悪行アクコトを擧アゲたるは彼カノ佐食神サケノカミの書シに耳ミミか須  
佐之男命ミコトノミコの悪行アクコトを擧アゲたる其事コト即古事記コトノミコトに須佐  
之男命ミコトノミコの事コトふる是等コトノミコト一神イツカミと云イふ事コト同ドウく夜之食  
然シカる言コトなり但月讀ツキヨミの讀ヨミは黄泉ヨミと名同ドウく夜之食  
國クニに由ヨりて云イふ非アらり月讀ツキヨミの月夜ツキヨと讀ヨミは夜之食  
雲クモの大地オホツチに對ツひ見ミる所トコロ知チ者モノ意イはる縁ヰ美ミと續ツく大日  
ず黄泉ヨミの地胎チノイに在アる國クニに月ツキの天アマに戀コイるコトハ一イツホ

爲ナる域イキなる者モノ 儲タケ此大神コノオホカミの尊ミコトく高タカき御功績ミコトノイサナ坐イる其手コノテ  
事コトの宝劔タカラノツルギ出現章イデノシラサキ就ツて説明シメるむ可カき日神ヒノカミと御  
誓チカひ御間ミマは珍ウツクシ子を生成ナマセし給タマへ水ミヅは皇御孫尊ミマノミコトノミコトの大神オホカミ  
祖神ソトノカミと坐イし又国土クニ經營イサナの御事業ミコトノイサナを國主神クニノミコトの事コト依ヨり  
給タマへる其大神コノオホカミ亦モ天神アメノカミの御命ミコトノミコトを奉タテマツて神事カミコトを所知チカ給  
へ水ミヅは此天下コノツチノナカの事コト就ツて顯露ウツクシ事コト画エガ冥事ミヤコト共トモに  
此大神コノオホカミの御子孫ミコトノミコトノミコトの所知チカ者モノ御事ミコトノイサナを以モつて御父母ミコトノイハハ  
二神イツカミの可以治天下也コトヲシラセと勅任ツケし給タマへる御旨ミコトノイサナを少違コトヲふ  
所トコロ無ナし又日神ヒノカミと相並アヒはる大地オホツチの晝夜ヒルヨリを持テ分クて所  
知チカ者モノは月讀尊ツキヨミノミコトと坐イる又天璽アメノイサナの八咫鏡ヤチヤミノカガミ草薙劔クサナヒノツルギ



相並ばりて天照太神と共々皇御孫尊の同大殿の  
内ニ鎮坐して護身御璽と齋祀させ御在り坐ふと少縁  
の事ふらず實は天皇尊の大御祖神とも称奉る可き  
大御神ニ渡り世給てる者を甚切可畏御心一違ふと  
神ニ如思成し奉る可らざる健く進りし御在る  
故に忌行す如く成らざる事少らざる雖も又其事小  
因て教へる盡し難き迄世中ニ甚しき吉事を成幸  
へ給へれば皆其の至る可き道行振り事少しと知心  
る者よりくく我高皇產靈尊神皇產靈尊の御事あり  
然しと盤古氏之後乃有三皇此天地人之祖也と有る  
天皇氏地皇氏人皇氏の事あり其天地二皇の歸味

△和泉風土記神須佐能尊有る外

の神あり伊弉諾伊弉册二神小坐し人皇氏と申す  
素戔嗚尊の漢名あり由云水たると信小動くす  
説ふ少赤縣太古傳春秋命登序考三五本國考等必見  
心し但道書に依り種々の奇怪しき事を云水たると  
我神須佐能尊の大道の旨は○神素戔嗚尊ハ出雲風土記に  
合す取捨し見ゆ○神須佐能命詔此國者雖小國々處也とも神須佐能  
衰命御子青幡佐草時命とも神須佐乃宇命御室令造  
給とも見ゆ此外より見當らざる宿神と冠し稱奉る事あり  
出雲神賀詞に伊射那伎乃日真名子加夫呂伎熊野大  
神梯御氣野命と稱奉る加夫呂伎と加く御祖  
小坐す謂と聞えたり天孫降臨章に神吾田津姬又神  
吾田鹿葦津姬と有る彦火と出見尊の御母と坐故と

神皇と申せりあり神日本磐余彦天皇と稱奉り  
 天皇尊の大御祖と坐せり然れハ古事記序  
 喫劔切蛇萬神蕃息と有ハ如ク一ハ天皇尊の大御  
 祖と坐テ其宝祚天壤と與ハ無窮ク傳ハル世給ハ二  
 ハ大同主神等ハ珍御子を坐坐テ其御木ヲ蕃息  
 神事を治リテ其祖神と坐故ハ然稱奉ル事ヲ祝  
 詞ハ神漏岐神漏美と有ハ神ハ其意近ク然レハ唯稱  
 辭ハ鹿ノ見ハ其ハ鎮大奈詞ハ神伊佐  
 二柱嫁延給氏回能八十回鳴能八十鳴年生給比八百  
 萬神等年生給比比麻奈第子年火結神生給比云々  
 有ハ其御子を坐坐テ對テハ伊弉諾尊伊弉册尊  
 御名ハ上ハ神字を冠テ神皇と稱申セリ者あり

ハヤリ空初出現  
 神皇  
 細書

○速素彥鳴尊古事記ハ建速須佐之男命と速須  
 佐之男命と有リ三代實錄ハ播磨國速素彥鳴神と  
 有リ又速を省テ武素彥鳴速と冠テ申テ例ハ第六一  
 書ハ速秋津日命第十一書ハ速玉之男と有ハ是ハ  
 上ハ冠ハ多ク下テ活クハ第六一書ハ速日  
 神速日神と見えたり何レハ迅速スヒヤと義あり然  
 レハ速素彥鳴尊と申奉ルハ御心ハ一速ク進メ坐  
 意ハ御名ありけり地名ハ速吸名門と云ハ瀨潮を  
 速ク吸入ス意あり風名ハ速飄  
 日云ハ飄ハ速ク吹卷ク名あり仁徳天皇御紀歌ハ瀨  
 箇始報破利摩波柳摩智と有ハ私記ハ三日ハ潮其流  
 急速故故讀早持之亮語置此言字と有ハ以テ速ハ急  
 速と事著明ハ各義集ハ速字を登志とハ須美夜加

傳三卷二百  
三下云べ

志と云訓り ○又古事記曰建速須佐之男命と有る健  
速進むと云事より同記曰速甕之多氣佐波夜遲奴美  
神と云名曰健真速と建速と同ト儲建と称たる例  
ハ此ト宝劔出現章曰武素戔鳴尊と有る第六一書小  
孫降臨章小武三熊之七人武素戔鳴尊ハ武進雄ノ意  
なりと始テ神名ト多ト  
あり古事記白檮原小神沼河耳命曰其兄神八耳命  
那注汝命持兵而入而殺當藝志美ト故持兵入以將殺  
之時手足和耶ト岐氏不得殺故尔其弟神沼河耳命乞  
取具兄所持之兵入殺當藝志美ト故亦称其弟名謂建  
沼河耳命ト有る如ク武勇ト進給ふ義多クを曉ト可

又瑞珠温物  
本留積成之雄  
高多ト見云又

鳥多ト有る多鷄盧ト亦此ト同ト又同見丘上則有八  
鷄盧ト有る多鷄盧ト亦此ト同ト十鳥師ト有る其下  
小鳥師此ト多鷄盧ト見えたる其を古事記ト八十建  
小作行を考合す可ト又日代宮殿ト小碓命ト  
自懐出劔取熊曾之衣於以劔自其胸刺通之時云云尔  
其熊曾建白信然也於西方除吾二人無建強人然於大  
倭國益吾二人而建男者坐初理是以吾獻神名自今以  
後應称倭建神子ト有る此等を以て建速ト義を曉り  
ぬト ○勇悍ト勇ハ氣進あり悍ハ猛ト此尊ト神性  
ト然トあり上ト説ト御名義を以曉ト可ト宝劔出現  
章第四一書ト出たる五十猛命ト氣進猛ト義あり又  
天孫降臨章ト辭氣を伊伎邪志ト訓ト皆同ト事ト  
人ト功を譽言テ伊蘇志ト云ト氣進ト義あり今ト俗  
ト人ト負ト魂有る事を氣ト勝ト云ト云ト勇ト云

○日本書紀傳八

○七十九

名義抄に逸字  
を伊夫利と見ゆ  
此に大勢と云同  
正しき言は出で  
て其の如き状を  
て情を云なり

小異ふ 悍を多初志と訓む其ハ武素夷鳴尊ハ武ニ同  
ト古語拾遺ハ天鈿女命ノ事ヲ其神強悍猛固故以爲  
若今俗強女謂之於須志此縁也ト有テ其ハ強悍猛  
固ハ四字を於須志ト云々如ク九テ武勇ハ逞<sup>逞</sup>ト云  
ハ恐カ<sup>カ</sup>ト云者多ク故ト聞由此ト下此ハ多初志ハ悍  
字を被用タル意を察ス可クナリ也ト有リ其ハ今本ハ  
訓多初志ト云々有リ依ルハ説<sup>説</sup>多クハ正しく有  
釋秘訓ハ引テ私記ハ師説ハ伊佐美多初久志ト有  
カ如ク訓<sup>訓</sup>〇安忍釋秘訓ハ伊夫理那流ト訓テ口訣ハ  
安忍憤也ト有リ倭姫命世記ハ載テ伊勢風上記ハ思  
神伊不加理ト云々有テ語有リ憤ト云々近キナリ

見古語拾遺  
帝ハ天孫ト云

名義抄小訶字を伊夫加留ト訓ふカ以思ふハ其憤ニ  
事ハ何ト依ルトト知<sup>知</sup>ルハ云々聞えナリ  
小俗稱剛愎者爲伊夫利故遣火曰救伊夫志火鬱而不  
能然曰伊夫留訶字訓伊夫加留万葉集鬱悒字訓伊夫  
加之訓伊夫世之俊頼歌山里波霧世奴霧乃伊夫世佐  
尔皆同美也勇悍字出火酷吏傳安忍字左氏傳隱ト云  
言多<sup>多</sup>〇以<sup>以</sup>哭<sup>哭</sup>泣<sup>泣</sup>爲行第二一書小此神性也常好哭  
志第六一書小素夷鳴尊年已長矣<sup>矣</sup>以<sup>以</sup>啼<sup>啼</sup>泣<sup>泣</sup>志恨  
ト云有リ此ハ古事記ハ速須佐之男命不治所命之回ハ  
拳須至于心前啼伊佐知伎ト有リ同ト傳多ク記傳七  
十九ト袖功皇后布紀ハ血泣<sup>血泣</sup>欽明天皇御紀ハ大息<sup>大息</sup>源  
運多ト有リ谷川氏ハ猶言足摩而泣也小兒忿泣時

公孫鏡前傳章上是  
後兼天武天皇御事  
也云々有るを以て

有此状と云り御記は志恨字を加へて書けたるも此  
意は小児の足を摩て行を伊佐留と云ふ此伊佐と  
木同ト言ふ也 ○今云字鏡集小塚をいひ此をいひ鏡をい  
伊佐布と訓たるも此も同言にて用ひ  
採り異れり 上は匍匐御枕方匍匐御足方而哭と有  
る状も似たり然るが彼法澤女神は法伊佐波女の意  
も四万葉五十四 小立字利足須里佐家婢伏仰武祢  
宇知奈氣吉まとも有けり有か如し 九卷詠永江浦鳴  
子歌も小立走也  
袖振及側足受利四管と有り古事記高津宮段に其状  
后石之日賣命甚多嫉妬云々言立者足母阿賀也迹嫉  
妬と有る阿賀也馬の足撥るなり如く足を踏きて  
怒りてはみりて小児の足を摩せる状も似たりあり此等  
を以て此の御有状 爲行の常日所作と成れるを云り  
をふは想像不可なり

公孫六書に國民と有  
る文字を以て其訓を  
そ古事記に人等と書  
事下に引く文を見  
知て

其御本性の武く速く進み給ふ任不天下を治給ふ方  
ふ御心を寄せ御在り坐せし御年の長き迄も幼  
げも御有状も有りあり又此も因て此大神の御  
稜威の勝るせ給へり事下も使青山愛枯の所も  
云か如し 此を唯は悪行の如く思はれり然る事あり  
記に仁多郡三津郷大神大元持命御子阿邊須杵高日  
子命御須髪入櫃于生晝夜哭坐之辞不通と有るを  
悪行と爲す ○国内人民第二一書より國民と作れど  
其訓同ト今正しく国内ハ久奴知と訓べきあり  
大板詞に國中ホ云々有り後釋に國中ホ俗に國  
中と云意ありハ万葉五又十七久奴知許等暮等と  
有る依り訓ヤし云れ 人民ハ第十一一書に顯見蒼  
たたり此も合ふあり

○日本書紀傳八

○八十一

生此云宇都志根阿烏比等久佐と有る是あり記傳六  
二十と青人草と云所以伊邪那美命言愛我那執命  
為如此者汝國之人草一日絞殺千頭云と是以一日十  
人死一日必千五百人生也と有る其意と草の利益  
と生茂の蔓と云と譬の稱あり青と云と云と  
心を着て一私記又蓋古以貴人喻於木云と以賤人喻  
於草故謂天下人民為青人草也と有る説り非あり故  
此稱の神の人の利益を為給ふ事と人の損害を為給  
ふ事と耳必用ふ稱あり神の人を利益給ふは千五  
百人生ると意あり諸損害  
を成すは其の逆の敵むなり故其の此稱を云とあり古  
書共を能見度しと眼を著て一予は云事の虚と云と

公釋秘訓上向良佐麻  
亦須止可讀之志即志  
年之熟不可讀之有  
以考之小何加良佐麻  
之那志年と訓たるを御  
讀之傳を故今如何  
訓と云と

公推哈天皇御紀  
指自中中  
取能解家と取  
歸國と見え又

事自曉と有る如し○天折ハ第二二書は國民多死  
見之其不意と忽と意あり皇極天皇御紀は急字を  
然訓るを考ふ可し名義抄に儻字を多知麻知又志  
尔又志謀良久又登志と訓と倏忽を阿加良志麻年と  
訓と又白地を也整を也同く訓なり又偷向の二字  
を以然訓ると就て考ると外より明日指入る程の疾  
意あり有る事決し先仁天皇御紀詔に安加良米佐須加  
等久と有る物語書と解と此の思ひ掛り俄と事と  
事知又忽と少外物為る事と阿加良佐麻は罷出ると有る  
事を阿加良米毛世受と云と俄と忽と少久目を離たぬ

○日本書紀傳八

○八十二

阿加良米須と云あり此ノ字如良米佐須と有レ爲ト  
 云ニ同ト目を指すレ物を見遣ニ事ナリ然レ此言  
 ハ物を目を着レ守居ニ程成ニ忽レ佗ノ目を然レハ  
 移ナ如クト云事ありト有レ此レ心得心レ然レハ  
 天折トハ素戔鳴尊ノ水ナリ然レ御心ハ御在レ坐  
 ぶク其突返ラ給ふ御勢ハ不意ノ人民ノ  
 亡失ノ事モ有レ多ト有レ以テ其並テ有  
 ぬ事ヲ曉テ可ク遷却案神詞ニ高津鳥殃ル依氏立處  
 天折出吳志孫登傳博雅不盡天年謂之天  
 說文短折也ト云少此字義を思ふ可ク侍青山變  
 枯第二一書ニ青山爲枯ト見え古事記ハ其返状者  
 青山也枯山泣枯河海者應泣乾云々ト有レ殊ニ季  
 子者ナリ龜ト祭文ニ青山成枯枯山成青ト有レ又

皇極天皇御紀ニ鞍作得志以虎爲友學取其術或使枯  
 山變爲青山或使黃地變爲白水ト有レ此ハ幻術ナリ  
 ハ右ノ例ニ引ベクナリ雖モ同ト類ナリ右ノ古  
 引テ云々ト有レ是以惡神之音如狹蠅皆萬物之  
 以悉究テ有レ文ナリ但其ハ天石屋殿ニ此ニ混レた  
 由己ニ鈴屋平田二翁ノ説ニ如ク此時ハ此尊一柱  
 御心進ビニ依レバ如何ト佗神ニ係ルベク  
 可青山ノ記傳七十九ニ水草ノ茂クテ青ト見ユ  
 山を云テ沼河比賣歌ノ所遠夜麻迹比賀迦久良導ト  
 云々始テ古書共ニ多ク中枯を迦良ト云ハ難波高津  
 朝小船名枯野歌ニ如良怒ト有レ如ク但枯山  
 の意ハ水草無ク山を云ふ可ク凡テ物ハ無ク  
 空ト云を迦良ト云其義ナリ云々云レハ取

難 青山を枯山ふすといふ今迄青と茂めたる山を冬  
枯の如く成す事あり古事記水垣小故科曙立王令字  
氣比白云と又在餅白橋之前葉廣熊白橋令字氣比枯  
亦令字氣比生と有て活と枯と爲る如く小  
其迄給ふと共よ青山の枯山と忽も變れり古事記  
其迄状者の上と云て下は迄枯と有を  
以て其迄給ふと因水の事を知ら可し因云右の古事  
記に河海者悉迄乾ハ亀ト祭文ハ清河成白川白川成  
清河と有る清河ハ水の流るる川あり白川ハ水ハ乾  
たる川あり然れハ青くと水ハ深く有る河海を迄  
乾し給ふ事此ハ人民を害ひ給ふ事を云るを古事記より山海川を云れハ人草を始め

万事の直りて甚廣き  
ハ古傳の任るる可し此章首ハ生海次生川次生山云  
こと有を以思ふ此ハ河海者悉迄乾ハ當れり語  
の有つるむを漏せりあり可し瑞珠盟約章あり昇天  
の所ハ湏渤以之鼓盪山岳爲之嗚响此則神性雄健使  
之然也と有る照し應せし知て此ハ一時の御忌行  
の如く思成し奉らるる物々此ハ依て素戔嗚尊と  
申奉らるる意を盡し宛れたる者より信ふ尊むべく奇  
しき理有り其使青山変枯と有る計ハ神稜成坐故よ  
宝劔出現章第四一書ハ素戔嗚尊帥其子五十猛神降  
到云々初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓



地盡以持歸遂始自筑紫凡大八州同之内莫不播殖而  
成青山焉と見えたる御功の立ける事ハ申し更なり  
又古事記一娶大山津見神之女名神大市比賣生子大  
牟神次字迦之御魂神と有る如く山神の女を娶て大  
牟神を生給へる年ハ田寄して春種子の生初るなり  
冬も至て枯藏る迄を即一年と云て物ハ榮枯有る  
又此ハ因り水多者なり然れハ此使青山変枯と有り  
小因て斯計なり甚ト神功を成給ふ至り尋  
常の神も出來て事ありテ天下之主者を生むと  
て生給へる神ハ坐故其始なり海山川共御心の  
任なり事此明くあり記傳ふ山海河の枯乾  
なり如何あり理あり有と云驚く置れたり

河海者委运乾ハ天下ハ君と坐故此大神の迄給へ  
乾て御心の任なりあり宝劍出現章第四一書ハ  
以壇土作舟乘之て見え第五一書ハ吾兒所御之國不  
有浮室者未是位也乃杉及檉樟此而樹者可以爲浮室  
也と有て河海を渡る事ハ此大神ハ始れる事ハ申す  
と更なり月神と成給へる其荒魂を豊玉壽神と申し  
て海神ハ坐り月の出沒ハ隨ひて其海潮の満ちり乾  
たり其御尾前と成て仕奉れる如く御稜成りと本  
より此時より其前ハ有りる事決し然るを御父大神  
の神逐ハせ給へる餘ハ御心行共ハ健速く進り坐

小御行末を危く所思しめて御事ありけり其も此  
 く被預銘造給不産靈の御所爲不依る所多し深  
 前後の趣を考定ぬ其首尾を結合せて説奉る可き者  
 ありし人如何に御行を思成し奉る可き所  
 決小魚が如く此御上よまの記者と雖も文を綴る  
 不悪行の如く取成さる事と少く見ゆ  
 り今予が臆見を以て説奉るむとす  
 ○其父母二神第二一書ふも此事  
 の見えたる共よ加曾伊呂波と訓り其も古訓ふ可  
 けれど美知と波と訓り一万余五十五父母守美  
 禮婆多布斗斯十九十四は知智之實乃父能美許等播  
 籓葉乃母能美許等と有て知と波と云事常ふ多

△玉勝間列：橋卷  
 少引れら清寧  
 天皇の吉備推後  
 の事を云て其腹  
 所生屋川皇子  
 又欽明天皇の難  
 是腹位信大  
 運推古天皇二十  
 御紀八八腹臣天  
 武天皇八年御紀  
 小五兄年長切  
 并十餘王各出行  
 異腹然不別回異  
 又光仁天皇寶  
 龜三年御紀三  
 腹位桓武天皇  
 延暦四年御紀  
 乃初遣臣八腹臣  
 又同九年小具上  
 師氏抱有腹  
 中宮母家者皇  
 毛受腹也云自  
 餘三腹者云同  
 十年其入  
 命子臣東國六腹  
 朝臣又國之  
 賜姓命氏多と多く又

在り言義父の血道母の腹より出たる可し父とい今  
 俗に其等族を血筋と云如く其身の出自に依て云  
 称あり母を腹と云ふ本朝月令に載る奈氏本系帳に  
 正一位勲一等招尾大神御社者筑紫胸形坐中都大神  
 戊辰年三月三日天下坐招尾日尾又云日 大宝元年川  
 邊腹男奈忌寸都理自日崎岑更奉請招尾又田口腹女  
 奈忌寸知麻留ヤ始立御所禮云と見えたり川邊腹  
 田口腹と云ふ各其母を云ふあり(又姓氏録)武内宿  
 祢の子八腹臣と云ふも其母を別と云ふを合せて云  
 るあり此を以て母の腹と云ふ其本同しを曉る可し

公之申本本本...  
 大連早都大良...  
 腹之見之可多能...  
 の所は申即古...  
 母其下有を...  
 二向トを...  
 氏族の事...  
 運若くハ...  
 多と訓べ...  
 韓國下も...  
 梅多可...  
 九うハ...

又申古言...  
 身身...  
 候...

源氏物語ふだハ后腹ハ某官腹ハ某ふハ云事多ハ其子ハ母を指テ云ハ云ハ兄弟を波良加良と云ハ腹族と云事ふハ加曾伊呂波と云ハ顯宗天皇御紀ハ思合ハ可ハ俗呼父為柯曾と見え和名抄ハ父を加曾と見えた少言義ハ上狭ハ云事ハ可ハ其曾ハ嬉執ハ衰勢ハの執ハ其嬉ハ事哀ハ事を其と指テ他ハ心の移ハ由ハ然ハ我身ハ上ハ父ハ外ハ勝ハ貴ハ者ハ以テ然ハ祚ハ聞ハ通証ハ父數也數世次以父也と云ハ云ハ事ハ信ハ難ハ又或者ハ加曾ハ家尊ハ云ハ云ハ事ハ伊呂波ハ字鏡集ハ父字母字ハ然有ハ父字を伊呂波と訓ハ誤ハ和名抄ハ母

を伊呂波と有り其伊呂ハ伊呂勢伊呂妹伊呂波伊呂  
 杼ふどの伊呂又御間城入彦五十瓊殖天皇活目入彦  
 五十狭茅天皇あど入ハ同ハ人ハ容テ親ハ意  
 あり波ハ母ハ省言ハ然ハ父ハ上ハ指テ嚴ハ  
 為ハ合セて母ハ殊ハ親ハ意ハ言ハけハ瑞  
 盟約章ハ父母ハ加曾伊呂ハ有ハ後ハ歌ハ多ハ然有ハ伊呂ハ親ハ由ハ以テ添ハ語  
 を成ハ可ハ信ハ知ハ波ハ云ハ其ハ實ハ合ハ称ハを  
 除テ又加曾伊呂波ハ云ハ如何ハ由ハ今茲ハ此  
 を考ハ知ハ波ハ云ハ時ハ本ハ名ハ加曾  
 伊呂波ハ云ハ時ハ敬ハ崇ハ語ハ成ハ高皇  
 産靈尊神

△九ノ傳ニ七  
カシ云

皇座靈尊と申す時ハ素より神名ありを別ニ神名  
を顯ハサズて小宜しき時ハ神漏岐神漏美命あり申  
上ルヨ同ト神紀ハ加曾伊呂波ト  
訓ルハ多クハ敬ハ意有時ハ事あり ○無道宝鏡南始  
章ニ素戔鳴尊之為行也其無状ト有リ此を古語拾遺  
小状無ト作ルヨ同ト事あり此大神ハ宇宙ニ君臨す  
可キ勅任ハ奉リおろシ其治給ふ可キ方ハ神心  
を寄給ハズして唯健速ニ神心行耳進リ御在リ  
ハ奥床ハ味ハ有ハ多事ハ無をむめ給ハ者  
ふて俗ハ物ハ奥床ハ味ハ熟味ハ無ハ云ハ云ハ  
同ト神紀ハ無形無端遊仙窟ハ無情ト有ハ皆然  
訓ハ歌ニ多ク所選伎那久ト多ク用ヒたるを無益ト  
云意ト説ナレハ無味氣ハ熟味ハ無ト謂ハ

△此言ハ當テ無道  
ノ字ヲ書レラズ  
八層ノ第五ハ不  
道ト云字ヲ取  
レラズ可シ名例  
律註ハ支解人造  
畜毒毒壓魁若  
敵皆云ト有カ右ノ  
令國內人民以テ  
折復使音山變  
枯ト云云當ハ  
者ナリ傳十五卷  
百六十五丁元並魚  
心ト有ラ下云云  
見合テ可シ

心得テ大旨違ふ可  
ハ云ハ者あり △ ○不可以君臨宇宙第二一書ハ汝  
治此國必云ト有ハ宇宙ハ此國ハ當リ君臨ハ治ハ  
當ルハあり然ルハ宇宙を阿未能斯多ト訓ルハ允ハ  
然ル可シ 名義抄ニ宇宙を阿未能斯多ト有リ神字を  
モ信ハ然訓ト有リ淮南子ニ四方上下謂之宇宙  
古來今謂之宙ト有リ其字を用ヒルハ事通証ト  
引ルガ 古史微ニ此文を見ルハ豫テ宇宙を御ハセト  
御依ハ有ハ云レハ云レハ實ニ然ル言あり先ハ  
可以君臨宇宙あり語無ハ此文ハ不意ト有テト  
非ル小就テ猶思ハ己ハ二神ハ何不生天下之主者  
歟ト宣ル小日神を生坐ル此ハ天上を知テ太神あり

次ある月神ハ此尊ハ異名あり蛭児ハ誤傳あり此等  
を除く時ハ天下之主者と申すハ此尊ハ坐水ハ不可  
以君臨宇宙ハ必宣ハ附ハべき者あり  
第二一書  
少カ治此國ハ有ハ素ハすハ此國を治ハ可ハ神ハ也ハ然  
生給ハ故ハありハ傳第六一書ハ素ハ素ハ鳴ハ尊ハ者ハ以ハ治ハ天  
下也ハ君臨ハ君登坐須ハ訓ハ上ハ天下之主者と  
有ハ主者ハ有ハ事ハをハ云ハありハ第二一書ハ治字を書ハ  
即君臨ハ所ハ知ハ有ハ御事ハを申ハせハありハ八洲起元章第  
一ハ一書ハ天神謂伊弉諾尊伊弉册尊曰有ハ豊葦原十五  
百秋瑞穂之地宜ハ汝往循ハ之ハ有ハ其國を勅任ハされ奉  
給ハハ信ハ宇宙ハ君臨ハ神ハハハ此大神ハ坐ハを

然ハ説明ハめハ説無ハ甚ハ淺ハ事ハありハ  
傳七卷六下ハ循字の意をまハ説ハを此ハ君  
臨宇宙の所ハ合ハ讀ハ其意味の深ハ事ハを求ハむ可ハ  
○固當遠適之根因矣第一一書ハ是性好殘害故令下  
治根因第二一書ハ故汝可以ハ取ハ極遠之根因ハ有ハ此  
三の傳共ハ父母二神の根因ハ逐給ハ不由ハ然ハ也  
も第六一書及古事記の趣ハを宜ハとハ南ハえハ其ハ  
右の傳ハ何ハハ伊弉册尊の御事を漏ハされハ傳  
あり故ハ其間ハの事を皆略ハれハ故ハ父母二神  
は傳ハたハ然ハ也ハ瑞珠盟約章ハ是後伊弉  
諾尊神功既畢靈運當遷ハ亦ハ白伊弉諾尊功既至矣  
是以攝為宮於淡路之洲

德亦大矣於是登天報命仍留宅於日之少宮矣と有る  
此等ハ其初二神相並ハシテ天神ヲ御命を奉給テバ  
幽宮ニ長隱少坐シ天ニ登クシテ報命ヲ給テ多ク必  
二神<sup>ハ</sup>御名を舉ぐル事ナシト云フ所アル事此ニ伊  
弉諾尊一神<sup>ハ</sup>御名耳出たる事如何ト云フ伊弉冉尊  
ノ黄泉國ニ往坐シ傳ハ伝ハ一書ニ任ねテ略セラル  
者多ク然見以テ行ダス時ハ前後ノ事打合ヒ難キを  
如何ト云フ爲ム又上ニ二神多ク事ナシ此ハ一  
神多クを以テ其所由豈無クモハ前後を照シ應セ  
テ言外<sup>ハ</sup>意味を知ル事ナシ皇典を見奉ル列多ク  
ハ此大凡ハ一所を撰テ一掬ニ儲第六一書及古事  
云説ハ何事モ云フ足ル病言ナリ儲第六一書及古事  
記ハ方正説多クむト云由ハ先此珍御子等ノ御事依

ハハハハ御父母ニ神多ク事ハ瑞珠盟約章アル天照  
太神ノ御言ニ夫父母既任諸子各有其境也有ルハ灼  
然シ然ル事第六一書ニ吾欲從母於根國ト有ル以思  
ふニ火神を生給ヒテ後ハ伊弉冉尊ハハハ根國ニ神  
遊坐シテハハ根鬚鬚ノ生テ迄ハ御母を慕ヒテ歎悲  
シ事世給ふ餘リハ宇宙ニ君臨シテ治給ふ事ハ何モ  
忘ル竟ラ世給ふるハ故ハ常以哭泣爲行ト有ル至水  
ノ一者多ク故古事記ハ速須佐之男命不知所命之國  
而八拳須至于心前啼伊佐知伎也ト有ル二神ヲ生坐  
シ初ナリ清水潔ク後ハ至テ迄ト見ルハ能南ハ又

故伊邪那岐大御神詔速須佐之男命何由以汝不治事  
依之因而哭伊佐知流之有八御父大神之根國ナリ歸  
く世給ふ迄の間を<sup>ハ</sup>給へる<sup>ハ</sup>其趣一朝一夕の  
事あり<sup>ハ</sup>狀あり次は僕者欲罷此國根之堅洲國<sup>ハ</sup>有  
る是<sup>ハ</sup>其御本心の顯ハル<sup>ハ</sup>なり次は伊邪那  
岐大御神大怒詔然者汝不可往此國乃神夜良比  
夜良比賜也と有<sup>ハ</sup>此の國當遠適之於根國と有<sup>ハ</sup>當  
行<sup>ハ</sup>と古事記及第六一書を以<sup>テ</sup>訂す時ハ此ハ父母  
二神の神逐給へる<sup>ハ</sup>非<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>也黃泉國の事を略れ  
たる<sup>ハ</sup>故に不意<sup>ニ</sup>此の事ハ二神ハ係<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>成<sup>ス</sup>

たる者あり然<sup>ル</sup>也<sup>ハ</sup>馬<sup>ハ</sup>隱<sup>ル</sup>也<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>伊  
如<sup>シ</sup>第六一書<sup>ハ</sup>伊邪諾等惡之曰<sup>ク</sup>可以任<sup>テ</sup>行<sup>ハ</sup>矣  
有<sup>ハ</sup>應<sup>テ</sup>給<sup>ヘ</sup>根國ハ第二第六一書又瑞珠盟約章  
より出たり古事記ハ右<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>根之堅洲國と有<sup>ル</sup>  
但其國ハ往<sup>テ</sup>著<sup>セ</sup>事<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>天上<sup>ニ</sup>參<sup>リ</sup>昇<sup>リ</sup>給<sup>ヒ</sup>種  
事<sup>ハ</sup>共有<sup>ス</sup>後<sup>ノ</sup>事<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>宝鏡<sup>ヲ</sup>開始<sup>ス</sup>章第三一書  
小<sup>ハ</sup>既<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>諸<sup>ノ</sup>神<sup>ハ</sup>噴<sup>キ</sup>素<sup>ヲ</sup>吹<sup>キ</sup>鳴<sup>キ</sup>尊<sup>曰</sup>汝<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>行<sup>ハ</sup>甚<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>賴<sup>シ</sup>故<sup>ニ</sup>不可<sup>ク</sup>任<sup>テ</sup>天  
上<sup>ニ</sup>亦<sup>ハ</sup>不可<sup>ク</sup>居<sup>ル</sup>於<sup>テ</sup>葦原<sup>ニ</sup>中國<sup>ニ</sup>宜<sup>シ</sup>急<sup>ニ</sup>適<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>底<sup>ニ</sup>根<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>共<sup>ニ</sup>逐<sup>テ</sup>降<sup>ル</sup>  
去<sup>リ</sup>當<sup>テ</sup>隨<sup>テ</sup>衆<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>目<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>永<sup>ク</sup>歸<sup>ル</sup>根<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>矣<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>  
然<sup>ル</sup>也<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>直<sup>ニ</sup>往<sup>テ</sup>給<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>より<sup>テ</sup>后<sup>ノ</sup>神

を聚く世給ひ御子神を教多き蓄息<sup>ウレツア</sup>給ひ已尊の國  
引り大功を建給ひ國土經營の萬事ハハハ大國主神  
小授任ぬさ世給ひて後不宝釵出現章又已而素戔嗚  
尊遂就於根國矣と有る如く物爲さ世給ひて少く  
其第五一書<sup>ニ</sup>然後素戔嗚尊居能成峯而遂入於根國  
者矣と有る能成峯より根國ニ入坐一<sup>ニ</sup>如見<sup>由</sup>此<sup>ニ</sup>  
然らず其より遂<sup>ニ</sup>何れより<sup>ニ</sup>故第六一書<sup>ニ</sup>至火神  
根國ニ入坐少く<sup>ニ</sup>義多き<sup>ニ</sup>あり  
斬過突智之生也其母伊弉冉尊見焦而化去<sup>ヤリシ</sup>云々然後  
伊弉諾尊追伊弉冉尊入於黃泉而及之云々其於泉津  
平坂所塞磐石是謂泉門塞大神と有る古事記<sup>ハ</sup>ハ黃  
泉國と有る然るを其一書<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>吾欲從母於根國<sup>ト</sup>

有るハ根國と云ハ黃泉國なる事灼然とを鎮火  
祭詞<sup>ハ</sup>ハ麻奈身子<sup>ハ</sup>火結神生給<sup>ハ</sup>美保登被燒<sup>ハ</sup>石  
隱坐<sup>ハ</sup>云々吾名峽能命波上津國<sup>ハ</sup>所知食<sup>ハ</sup>倍<sup>ハ</sup>波下  
津國<sup>ハ</sup>所知上<sup>ハ</sup>申給<sup>ハ</sup>與美津枚坂<sup>ハ</sup>至坐<sup>ハ</sup>云々と有  
を以て根國又下津國なる事知て右より引る宝鏡向  
始章第三二書<sup>ハ</sup>小底根之國<sup>ト</sup>云々下津國<sup>ト</sup>云々  
同ハ事なり大板詞<sup>ハ</sup>小根國底之國<sup>ハ</sup>坐云々道饗祭詞  
小根國底國<sup>ハ</sup>與<sup>ハ</sup>鹿<sup>ハ</sup>備<sup>ハ</sup>跡<sup>ハ</sup>備<sup>ハ</sup>來物<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>備<sup>ハ</sup>借<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>小  
<sup>ハ</sup>右<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>根國<sup>ト</sup>多<sup>ク</sup>素戔嗚  
尊<sup>ハ</sup>御事<sup>ハ</sup>迹<sup>ハ</sup>係<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>耳<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>黃泉國<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>伊  
弉冉尊<sup>ハ</sup>係<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>耳<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>所以<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>思  
え<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>探<sup>ハ</sup>索<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>絶<sup>ハ</sup>妻<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>誓<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>建<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>此



上津國より通ひし故に其國よりして夜中國なる事  
を親しく見給へりしは然宜しきを其より彼此の  
往來を所給へり後何事の抱き唯大地中より胎  
中れたる片隅の國なる故に根國といふに不有けり  
諸根國の所在は何方なるに考ふ小記傳七 二十  
二根之堅洲國の根は下つ底に有故に云ふ草木の根  
も同下堅洲國の片隅の意なり其は横東西南北隅は  
非下堅下りの片隅より下つ底の方を云ふなり  
ハ書紀は所謂天日隅宮を出雲風土記は天日柘宮と  
有少柘字ハ古書に必須と訓ふ例なり又記中ハ天之  
瑞葉と云ふとも日隅と通ふり姓氏錄は宗形朝臣の祖  
の吾田片隅命を舊事紀にハ阿田賀多須命と有少以  
上撮と有少如し其下つ底に在る根り如何ありし  
有るむと思ふ己に傳五二十惶根尊の下に註せり

如く底津石根より堅く重シ疑たる隈處に在る國なり  
若く其大地の圓體よりハ鶏子の如くある物なりハ  
四方上下有る事無きハ地心を底津石根と云て巖石  
を以てハ円ハ外表ハ海水ハ國土といふにハ人民此に因  
て住る萬物此に於て生る處なる故に鎮火祭詞より  
此を上津國と云り諸四方上下無き大地なる故に各  
我が所在を本とししハ四維を分り上下を定る物なり  
故に大地萬國は住む人の上より於て各其戴く所元ふ  
り上より又其各履む所地より下より然れば地上より  
在る者の上より根より底と爲る所ハ其底津石根より

在る地心より外より有てくず漢籍素問曰黃帝請天師而向之曰地之  
高下否乎岐伯曰地為人之下大虛之中者也帝曰憑乎岐伯曰大氣舉之也有張少賓注小人在地之上天  
在人之上以人之所見言則上為天下為地以天地之全  
體言則天包地之外地居天之中故曰大虛之中者也由  
此觀之地非天之下矣祝詞曰高天原と云ると對して  
下津石根と云ると以思ふと根國ハ石根の中は在る  
空洞多々城多々者多々其ハ鎮火祭詞ハ石隱給此與  
美津枚坂ハ至坐と有を以知くわたり第六二書ハ其  
於泉津平坂所塞磐石是謂泉内塞大神と有めて其  
國ハ入る門ハ巖多々事を知べし然るを三大考靈真  
桓共ハ國名ハ黃泉と月神ハ月讀とを一ハ為たる説

有れども其泉内塞大神ハ古事記ハ塞坐黃泉戸大  
神と有て道饗祭詞ハ謂ゆハ八衢比古八衢比賣神  
ハ坐事古史微ハ説ハ依て予己ハ祝詞講義ハ明くめ  
たると加ハ其詞ハ根國底國與鹿備疎備來物云々  
と有て其神ハ黃泉戸ハ塞坐て根國底國より來る物  
を障給ふ由縁ハ因て大八衢ハ坐て其加ハ守給ふハ  
ハ若大地ハ屬ハ根國ハ有けるハ其ハ分去て月と  
ハ成水とむふハ其黃泉戸ハ塞坐る無用ハ成ハ水ハ  
ハ又親しく眼前ハ見ゆハ月國ハ入ハ黃泉元ハと  
ハ入るハ事餘ハ迂遠ハ事多々ハ又大板詞  
ハ根國底

之國生速佐須良比咩止云神持佐須良比失近年と  
有高山短山の末より真下密より落龍津速川  
大海に持出る次序を以て地心ありてハ叶ハズ  
者ありずや御鎮座傳記に速佐須良比賣神土藏靈  
貴也と有る土藏ハ土中ニ藏る由を以書りて黄泉  
國の事あり其靈貴と云を以見ルハ根國に留り生  
和魂神に坐り 若て其根國底國ハ素より大地  
の中心あり城あり有れば別ニ造給ひしハ非可  
を伊弉册尊己に其國に入坐て黄泉津大神と申す由  
古事記に見たり如く素戔嗚尊其國に入坐り依  
て八束髮速佐須良命に申す由日御崎社記に有る其  
ハ高天原より解除を負せし時ハ事に依り万  
葉三四十一 天有左佐羅能小野之七相管十六 三十一  
一十一

天尔有哉神樂良能小野尔茅草萌あり有て天より流  
離入給ひし故に地名と成りしと其ハ天小然と  
地名の遺りし者あり若て素戔嗚尊此國より根國  
に入坐し後ハ其正身ハ月國に出生て根國に其和  
魂に坐り速佐須良比咩神に留まり坐りし其ハ  
大被詞に在り如く顯國に被ふ所の罪咎を行盡す  
極ありハ其極より水が清りしと後ハ常理あり  
ハ月神と成給ひて日神と共に大地の晝夜を分て  
守衛しせる小ハ至山し者あり 其ハ伊弉諾尊ハ黄泉  
大御身祿を為給へり因て善神を敬多小生給へり  
如く素戔嗚尊に始りて神心に如く根國に至り坐

一ッバ其天澤等の事ハ悉クハ流離ルニ亡テ終ニ月  
神トハ成給ヘル者多ク可シ然ルガ第六ノ書及古事  
記ニ御身滌の時ニ日神月神ノ成坐ル由ニ傳タルハ  
全ク右ノ事ノ混ヒテ然ハ傳ハルル可シ如此ク  
見分る時ハ其兩説共ニ少  
も疑ふ所無キニ至ル可シ故尾崎神社記ニ天地神祇  
記日速佐須良比賣神土藏靈貴也也素戔嗚尊合乃坐  
給之是即素戔嗚尊和魂而分身御子也ト有ル其神即  
土藏ヨミツクミノ靈貴リキト坐セバ此ノリ月神トハ成給ヒテ夜之  
食國ヨミツクミを所知看ケ事決シ其ハ万葉六十七ニ山景左佐  
良棧壯子ト詠ル注ニ或日月別名云佐最良衣壯士也  
ト有ル天ノ下流離ルヘタル男神ト坐テ由ル事右  
ノ引ルハ東髪速佐須良命又左佐羅能小野あどを思合セテ曉ニ可シ皇太

神宮儀式帳小大土神社一處祇園生神見大國玉命次  
水佐ノ良比古命佐ノ良比賣命ト有ル園生神ハ二神  
小渡ノセ給ふ事丹後風土記小園生大神ト有ル以知  
也一大國玉神ハ素戔嗚尊御子ありハ園生神見ト  
有ハ叶ハぶ水ト其因小依テ水佐ノ良比古命ハ素  
戔嗚尊佐ノ良比賣命ハ速佐須良比賣命ト有ル事知ル  
ルルル思ふ水ハ瑞借字ニ月神ト坐テ照  
シ給ふ事あり可シ神名式小越前國敦賀郡伊佐奈彦  
神社玉佐ノ良彦神社有ル同神あり可ク思ハ其ハ  
気比神社七座並名ハ保食神を主トシテ祭ルハ函契

有るはあり第十一の書の趣考合す可き事あり然れ  
ば月讀尊の亦御名素戔嗚尊あり非ず素戔嗚尊の  
亦御名月讀尊あり此大地に君臨すを本ありて月國  
をも兼知るせる大神に坐事決し又根國の月國の  
一多くざる事をも曉る可くあり有ける然れば強し  
たる始を此大神に係るあり及ふ可くざる本ありて在り  
つつ月の主宰として入るせ給へるあり本ありて在り  
高天原の主宰として坐す日神の後に成す  
成坐る神として君主として坐す同し○遂逐之の第六一  
書に可任情行矣乃逐之古事記に汝不可任此國乃神  
夜良比尔夜良比賜也と有り記傳七二十一夜良布の  
本夜流を延たる言あり逐は今俗に云ふ追放ありと

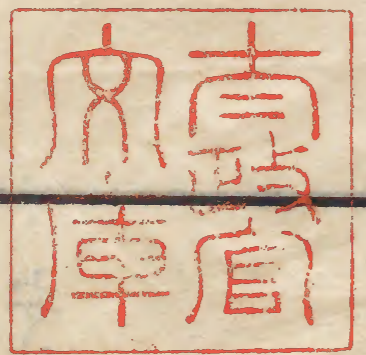
有か如し神門祭詞に待防掃却言排坐に有る却  
持退出に被却止宣と有る若て瑞珠盟約章に此文に續く  
きて於是素戔嗚尊請曰吾今奉教將就根國故欲暫向  
高天原與御相見而後永退矣勅許之乃昇詣之於天也  
と有り如此く逐は此坐す相見奉り退坐す  
と申給ひ御父大神も亦逐ひ坐す根國に就す  
き神の打替りて天に昇りと請申せるを勅許し給へ  
へる共に御父子の御間に取り其然に爲給へて得る  
有る物の成行ふ有る此に依りて二神の御  
功業に申す更あり此大神の大あり御徳を成就す

給へりし事次々小説明くむるを見て知べし實ふハ  
彼月神<sup>の</sup>御言ふ我祖高皇產靈尊有預鑄造天地之功  
と有ハ此等<sup>の</sup>御事業の上不在事あり仰ふ可し尊  
む可し其ハ次章ハ是後伊弉諾尊神功既畢靈運富邊<sup>邊</sup>  
是以構函宮於淡路之洲寂然長隱者矣亦曰伊弉諾尊  
功既至矣德亦大矣於是登天報命仍留宅於日之少宮  
矣と有る文ハ神功既畢とハ功既至矣と見えたる  
を此ハ合せて考見よ己ハ不生天下之主者歟と宣ひ  
て生坐る二柱御子の中ハ日神ハ素天の天上を所知  
看べしハ富ハ然有て事あり然ハ天下之主者ハ

ハ素天鳴尊<sup>が</sup>其任ハ富とせ給へるを其神を逐給ひ  
て此国土をハ虚しく成給へる其を神功既畢とハ功  
既至矣とハ所思し看し函宮ハ隱給ひ又上天ハ復  
命し給ふと云ハ神心ハ終ハ若此く成て者不<sup>と</sup>  
其事の至る所を見究め給はずして出来ま<sup>し</sup>事  
ありず也<sup>也</sup>二神ハ初天降り坐しハ此国土を修理固  
成む爲<sup>し</sup>て其より外ハ事無を如此く  
此国土を生置しあり此国土ハ君臨<sup>す</sup>神の未定<sup>く</sup>  
ざるハ半途<sup>より</sup>して然物爲給へる如<sup>し</sup>所<sup>を</sup>眼<sup>を</sup>著  
しけ<sup>る</sup>然ハハ高天原ハ上世奉<sup>り</sup>むハ此神ハ健  
速く進<sup>み</sup>坐<sup>す</sup>御所行<sup>す</sup>日神ハ平和<sup>あり</sup>御所爲  
とハ依<sup>り</sup>て斯<sup>る</sup>事ハ出来<sup>る</sup>む其ハ依<sup>り</sup>て天津日嗣ハ定

少坐天下小君臨事ハ出來ルビト其特殊の較略  
 を所知ト耳ある先小生坐皇太神也日神小  
 不渡世給へ此其初天下之主者を生むと御言舉  
 して成給へる御子小坐世ハ素戔嗚尊ト共小生給ハ  
 出皇太子天下ハ所看可事ありけりと思  
 一定給へるが故あり此も亦言靈の幸延ち事傳七  
 八十小云を見て知べきあり然るが故ハ此章あり  
 九下事多心多在りけり然るを古より此深き旨を得難  
 る人無故小日神の神未りして天下所看すを疑  
 び或ハ素戔嗚尊ハ逐ハ此坐る小依り日神の御子不  
 天下ハ所看しけるまど何れも二神小係たを説  
 無きハ悉く非此を以て我皇御孫尊ハも天照皇  
 多者不りし

太神素戔嗚尊の御子小渡り世給ひて其日神月神の  
 晝夜を持分て夜守日護小守給ふ大地萬國の大君主  
 宰と坐りて現御神と天下小照臨と坐る事實小所以  
 有る御事ふる者あり此皆皇祖天神の御議りて成  
 水事右小云るが如し



安政二年正月十五日始二月九日成

Handwritten text in vertical columns, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. The text appears to be a formal document or record.

七月二十八日校了

四十六葉

平島好正



